

くろつち ことばつみま いせき  
久路土の弘法様の井堰

豊前市の久路土から新吉富村の成恒にぬける「新生橋」の手前、左側の田の中にポツンとコンクリートのほこらが見えます。一見、田の中にあるように見えますが、実は佐井川から取水している土管の上に建てられています。中には、いつのころから弘法様の石仏がまつられていて、こんな言い伝えがあります。

むかし、むかし。

何日も何日も雨が降らず、かんかん照りの日々が続ぎ、辺り一面、大干ばつでたいそう困っておりまして。田に水が入らず、このままではいねがかれてしまいます。何としてでも水を田に送りたいと、村人たちは総出で佐井川から水を引いている井堰の修理をしております。

「小昼にしよう。」

時刻も三時を過ぎ、小昼時になりました。村人は仕事を休み、こぞつておにぎりを食べておりました。すると、たいそう貧しい身なりをした旅のお坊さんが通りかかりました。

「はらがへつとるんじやろつ。」

親切な村人は、小昼にお坊さんをさそいました。そして一



弘法様のほこら

しよにおにぎりを食べながら、よもやま話はなしに花はなをさかせました。でも、いきつくとこは水のこと。

「こげえ雨が降らんじゃったら、今年ことしも米こめはとれん。」

「そげじやのう、こん井堰いせきにやあ水はたまるほどありやせん。」

村人は、水不足みずぶそくでたいそう困こまっていることを口々くちくちに話しました。

「さあ、さあ、もうひとふんばりせにやあ。」

小昼おひるも終わり、村人は、また仕事にとりかかりました。村人の話をだまって聞いていたお坊さんも、厚あつくお礼れいを言ってこしをあげました。そして、お坊さんは何なにを思おもったか村人が仕事をしている井堰いせきに近ちかづくくと、持もっていたつえで井堰いせきの中をコツン、コツンとつつき、去さって行いきました。

さて、この旅のお坊さんが立ち去たってしばらくすると、村人は井堰の水かさが増ましてくることに気きづきました。よく見ると、なんとあのお坊さんがつついた辺りから水がボゴボゴふき出でしているではありませんか。

「水じゃあ、水じゃあ。」

村人は大喜こゝろび。井堰にはみるみる水があふれ、あふれた水は辺りの田畑をうるおしていききました。

それからというもの、どんな大干ばつの時でもこの井堰の水はかれることがないといいます。村人たちは、この貧しい身なりの旅のお坊さんが弘法大師こうぼうだいたいしであったことをあとで知しりました。大師かんしやに感謝



するとともに、その徳<sup>とく</sup>をしのび、井堰<sup>いづみ</sup>の横<sup>よこ</sup>に小さなほころを作<sup>つく</sup>り、弘法大師をおまつりしました。そして、この井堰を弘法様の井堰、『弘法井堰』と呼<sup>よ</sup>ぶようになったそうです。

小昼・・・三時のおやつ



(亀田清美)